

# 法政大学学術機関リポジトリ

## HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

### 古川成美『沖縄の最後』におけるテクストの 変遷と戦場への眼差し：初出版の問題点と 改訂版の差異をめぐって

柳井，貴士 / ヤナイ，タカシ

---

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究 / 沖縄文化研究

(巻 / Volume)

41

(開始ページ / Start Page)

327

(終了ページ / End Page)

362

(発行年 / Year)

2015-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010694>

# 古川成美『沖縄の最後』における

## テクストの変遷と戦場への眼差し

—初出版の問題点と改訂版の差異をめぐつて—

柳井貴士

### 1 テクストの変遷

古川成美の一九四七年出版『沖縄の最後<sup>〔1〕</sup>』は第一部「運命の兵士」、第二部「ひらけゆく心」の構成をなす記録文学作品である。第一部では沖縄への転進と戦闘を語り、第二部では捕虜生活を通して接した米軍への眼差しが主題となる。その「自序」には、「一人ひとり聖書を持てる軍隊が／現実に世に在りしをぞ知る」とあり、「長い苦しい悪夢のような戦の後、同胞がおそるおそる迎えた上陸軍は、あの悪夢からの連想とは全くかけはなれた、微塵の荒々しさもとどめぬやさしい愛の使徒たちであつた」と、古川は米軍への感慨を述べている。

古川成美は大正五（一九一六）年に和歌山県で生まれ、昭和十六（一九四一）年に広島文理科大学史学科を卒業している。昭和十九（一九四四）年に「独立高射砲第八一大隊、球一二四二五部隊」に召集され沖縄戦に参加した。同年一〇月に大隊本部で行われた幹部候補生試験に合格、予備士官学校入学の話があり、また陸軍幼年学校の文官教授として採用される話もあつたが沖縄戦激化のため内地へ戻ることが出来なかつた。<sup>(2)</sup> 古川は大学史学科を卒業した知識人として沖縄戦に参加したのである。<sup>(3)</sup>

戦争体験者としての古川の手による『沖縄の最後』「第一部」は「九章」からの構成となり、著者が福井県鯖江を出発し、門司や鹿児島を経て沖縄へ到着、北飛行場での作業や敵襲、昭和二十（一九四五）年正月における住民との接触、米軍上陸後の戦闘と仲間の死や己の怪我、沖縄南部の流浪の日々、摩文仁における牛島中将、長参謀長の最後が描かれる〔輸送船〕「黒い翼」「狙われた島」「洞窟戦」「照る日曇る日」「流浪の兵」「白昼夢」「修羅場」「島の最後」。「第二部」では米軍の第七師団に救助された後、屋嘉収容所で体験した米兵の愛ある行為への感動が主に描かれる。当然、対比的に日本軍は批判の対象となる〔「黒潮の音」「散りのこる」「キャンプ村」「米野戰病院」「母国の声」「歌のしらべ」「へだてなき仁愛」「忘れえぬ人々」〕。

『沖縄の最後』は、初版が刊行された翌一九四八年六月（五版確認）に「海外輸出記念国内特製版」として再出版された。本文の異同はないが、「初版」と「輸出版」では装画とカットが異なり、前者は太田天橋、後者は向井潤吉が担当している。また後者の表紙には〈OKINAWA NO SAIGO〉と

ローマ字がふられ、また裏表紙上部には〈Printed in occupied Japan〉とあり、GHQの検閲がうかがえる<sup>(4)</sup>。また「初版」三頁に付された「著者に対するクレマ中尉の推薦状写し」は削除され、「海外版発行に際して」として古川の言葉が乗せられている<sup>(5)</sup>。

一九六七年十二月には改訂版が、河出書房「太平洋戦記」シリーズの一冊として刊行される。本書の帯には「全国民必読の書」と書かれ、同時発売図書の、森捨三『雷撃記出動』と、安田義人『加藤隼戦闘隊』の書名が記されている。さらに帯には牛島満中将の顔写真と、米軍のものと思われる艦船の写真が付されている。この改訂版は、初版とは内容が大きく異なる。結論から言えば、戦後に得られた沖縄戦全体像への古川の関心が反映され、一兵士の手記を越え、〈巨視的な視点〉から描かれているといえる<sup>(6)</sup>。この改訂版はさらに一九七三年八月に重版される。この表紙ではそれまで横書きだったタイトルや著者名が縦書きに変更されているが、内容に関して差異はない。さらに、河出書房から一九七五年十月、「太平洋戦記（13）」として刊行されている。横書きされた表紙には、「日本防衛の砦となつた沖縄の悲劇」の一文が付されている。

一九八八年四月には、同じく河出書房から新装版として再び刊行される。一九六七年、七三年、七五年、八八年版は表紙こそ違えど内容は同じであった（誤字や脱字も改められていない）。本論では、一九四七年（初出）、四八年（海外輸出記念国内特製版）に中央社から出版されたものを「初出版」とし、河出書房から刊行されたものを「改訂版」とよぶ。

本論考では、初版『沖縄の最後』をめぐる言説を確認し、またテクストが孕んでいる問題点を指摘、分析する。また改訂版との差異を考えながら、沖縄戦体験者である古川の作品に含み込まれた、知識人兵士のひとつの型を見出していく。

## 2 記録文学と初出版『沖縄の最後』

戦後の出版業界において、記録文学の流行があつたことはよく知られている。例えば、岩上順一は、戦前、ルポルタージュ文学、記録報道文学活動が自己解放の武器として機能し始めながらも、軍国主義によつて「帝国主義戦争発展のための記録報道文学」として利用されたと述べ、戦後における記録報道文学は「労働者農民大衆の手によつて奪還」されることを要求した<sup>(2)</sup>。また松本正雄は、日本において「戦争記録文学として見るべきものはほとんどなかつた」とし、「これに反してアメリカでは、戦争目的が民主主義の擁護という一点にかかり、かつ報道の自由が確保されていた」ゆえ、アメリカでは戦争に関する記録文学が流行したと指摘している<sup>(3)</sup>。いずれも一九四六年、戦後早い時期の指摘であり、それぞれマルクス主義的文芸論、無条件的な米国賛美の傾向が認められる。

また、浦田義和は記録文学に関する言説が一九四九年ごろから「全国各地の各種雑誌で肯定的にとらえられている」として、名古屋や宮崎県、福岡県、あるいは香川県高松市の四国新聞社発行『四国

春秋』に掲載された言説を紹介している<sup>(9)</sup>。

一九四九年の『雄鶏通信』「編集後記」には次のような文章がみられる<sup>(10)</sup>。

『今年の流行はロングスカートと記録文学だ』と誰かが書いてゐたがたしかに記録文学はロングスカートとならぶほど流行してゐる。中央公論とか文藝春秋などの綜合、文芸雑誌からサロン、キングの大衆雑誌、朝日、読売の週刊誌に至るまで、どの雑誌も記録文学を募集し、競つて掲載してゐる。この現象は、敗戦直後のあの肉体文学の流行よりもはるかに広範囲であり、深い意味をもつもののやうだ。よく云へばそれは、日本人が冷静に自らを反省しはじめたこと、および異常な体験を語る喜びの現はれであり、悪く云えば戦後生活の窮屈感の解放、および慘めな自己の姿を見凝める自虐的傾向の現れといへやう。

ここでは記録文学の隆盛が、総合、文芸雑誌、大衆雑誌、週刊誌にまで拡大されていることが述べられている。一九四九年ごろを頂点とした記録文学の流行が確認できる。同誌別月の「編集後記」には、「大衆の眞の経験と意欲の中から生れる生きた報告としての記録文学は、けつしてさう簡単に消えざりは」せず、「戦中戦後を通じて民衆の獲得した体験はかつてない深く尊いものであつたし、現在でもさうであり、われわれはそれを多くの人々に伝へわかつ権利と喜びをはじめて享受してゐる時なのであるから」、仮に記録文学が廃れても、こういった意識は重視されるべきだと喧伝されている<sup>(11)</sup>。『沖縄の最後』は一九四七年という、終戦後比較的早い、記録文学の流行期直前に刊行されている。

本書は「輸出版」を通して、戦時から戦後の沖縄の状況を知りたいという、海外も含めた多様な読者の欲望に呼応する役割を果したといえる。

『戦後記録文学文献目録』、「第十三部 硫黄島と沖縄」には、この地域に関するものが八作品挙げられている。その中で一九四七年の発表は『沖縄の最後』だけである。<sup>(13)</sup> 本書の「まえがき」には「戦後の世界的現象につながるものに、ノン・フィクションとか、セミ・ドキュメントとかいわれるものの空前な流行がある」と書かれ、その原因が商業ジャーナリズムの爛るセンセーションナリズムだとされる。だがその背後には「純粹な民衆の意志」が想定されるとされ、それに関する説明がなされる。すなわち「純粹な民衆の意志」とは、「戦争という異常な民族的体験を、永くたゞしく後世に残したいという歴史的意識」と「人間が、戦争や戦争によつて惹起せられたぎりぎりの環境において、どのように反応し、どのような心理状態に至るかを実験しようと試みる文学上の興味」だとされるのだ。これらふたつは対立しながら、またひとつになり得、あるいは「その中間にさまざまな読物をはさみながら氾濫している」と分析されている。もちろんこれは記録文学一般を指した言説だが、「純粹な民衆の意志」は『沖縄の最後』においても関わり得る問題といえる。

一九四五年四月、米軍との沖縄上陸戦がはじまった。海軍元帥ニミツツにより「米海軍軍政布告第一号」が発せられ、日本との戦争遂行上、必要とされた日本帝国の行政権の停止と軍政府設立が宣せられている。だが、「日本の降伏によつて、ニミツツ布告にいう軍政府設立の必要性は解消したので

あるが、米軍による沖縄の排他的支配は解消されな<sup>14)</sup>いという特殊な状況が継続された。こういった環境、本土との差異を含み込んだ状況が前提とされるなかで、古川作品は刊行された。つまり、「第一部」では戦争の過酷さ（敗走する兵士）を描き、対照的に「第二部」では敗残兵に對して寛容な米軍人との親和性が前景化されるのである。言い換えれば、日本から切り離され、不可視とされていく沖縄への、本土読者の知りたいという欲望に対して答えながら、一方で米軍の「排他的支配」を見えなくさせ、あるいはその有用性を喧伝する効果を持ち得たともいえる。

それゆえ、『沖縄の最後』をめぐっては、仲原善忠が「同書は「沖縄戦における一人の超国家主義者の手記」というのが正し」<sup>15)</sup>く、「沖縄人を土民扱いにしつつ逸速く虚名と印税をかせいだ筆者の悪どさと書名につられて買ったお人よしの沖縄人とはよい対照」と指摘<sup>16)</sup>し、比嘉春潮も「「沖縄の最後」については仲原君が前号において「ひとりの超国家主義者の手記」と断じたが同感である」と述べている。「純粹な民衆の意志」といった感性を有する本土の状況における先の言説と、沖縄にアイデンティティをもつ仲原ら論者の批評の温度差を読みとることは困難ではない。

では古川の作品にはいかなる記述がみられるのだろうか。初出『沖縄の最後』の「自序」には次のような文書がみられる。

一人ひとり聖書を持つてゐる軍隊が／現実に世に在りしをぞ知る

長い苦しい悪夢のような戦の後、同胞がおそるおそる迎えた上陸軍は、あの悪夢からの連想とは

全くかけはなれた、微塵の荒々しさもとどめぬやさしい愛の使徒たちであった。／それから幾年、戦敗国日本は、この聖書をもてる兵士たちを育てた米本国、その兵士たちを統率する総司令部の、歴史に前例のない厚意の下に、一歩一歩、いばらの途を切り拓きつつ、再建への希望ある日々を送つてゐる。（中略）／ここに、太平洋戦争の大詰となつた沖縄戦の真相を記し、今は亡い将兵たちがすごした島の生活辿つた運命のあとを伝えると共に、不思議にも生命を永らえた後、米国人よりうけた数々の厚遇を述べるのは、全くこの趣旨に外ならない。

ここでは、まず収容所で出会つた米軍兵士への親和性が述べられる。次に、「沖縄戦の真相」を記すことが目的とされた。さらに古川は「この貧しい一書が、肉親の面影を逐うて、日夜その消息を求めている遺族の方をはじめ、多くの人々に読まれて、叙上の趣意の下に、正しい平和の建設と、米国人の美点の認識に寄与できるならば、これにすぎる幸はない」と言う。この「自序」からは、「沖縄の最後」が本土兵士の遺族への報告と、米国への感謝を目的としている点がうかがえる。つまり戦場となつた沖縄、その住民へ眼差しは向けられていないのである。日本帝国軍人から米国支持者への〈転向〉という言説がここにはある。米国人からの「厚遇」に対して、自省もなく感化される姿は、仲原が厳しい口調で指摘した「超國家主義者」——それは、二者択一的に米国「主義者」となり、自省を欠いたまま同意してしまうという意味で、正しいと言える。

聖書への接近は、例えば沖縄県公文書館に保管された収容所の映像からも見てとれる。収容所内で

は、簡易ピアノを伴奏に、聖歌を歌う日本兵捕虜の姿を発見できる。<sup>(17)</sup> キリスト教的博愛主義、そこに対置されることが容易に想像できる軍国主義や天皇の存在が、聖書の文言や歌唱を通して、捕虜の中に「教育」されていく。「自序」において、聖書を持つ米国兵士の「歴史に前例のない厚意」への感動を述べる古川も、同じような「教育」を受けたものと思われる。

### 3 「一兵士の眼差し」から「巨視的な視点」へ

沖縄へ渡り、沖縄第二中学校に仮泊していた古川所属部隊は、一九四四年八月十三日、北飛行場対空警備の任務を受けた。「読谷山村への飛行場建設は、戦中から戦後の現在に至るまで、村民の生活を大きく規制していると言つても過言ではない」との指摘があるように、古川の勤務した北飛行場は現在においても読谷に爪痕を残している。<sup>(18)</sup>

前述したように、古川は高射砲第八一大隊（球一二四二五部隊）に所属していた。この部隊に関しては『読谷村史』に以下の記述がある。<sup>(19)</sup>

第二十一野戦高射砲司令部指揮下で、昭和十九年八月二十日から昭和二十年三月下旬まで北飛行場周辺に駐屯した。連隊本部は伊良皆、第一中隊は大木、第二中隊は楚辺、第三中隊は伊良皆にそれぞれ駐屯し、北飛行場の防空任務についた。（中略）昭和二十年三月六日、村内から島尻方

面へ防衛召集を受けた人達が「役場で一日講習を受けた後、夕方、現読谷高校グラウンドにあつた野戦高射砲第八一大隊で夕飯を取つたが大変おいしかった」と証言している。昭和二十年三月二十七日、第六十二師団に配属され南部へ移動。昭和二十年五月十日、首里に転進。戦闘が激しくなるにつれて真栄平、真壁へと移り、同年六月十九日、残存兵力大隊長以下約一五〇名が斬り込みを敢行し、部隊は壊滅した。

『沖縄の最後』「第一部」にも、南部への移動の場面が描かれている。古川の言うように、「洞窟戦」を強いられた流浪の兵士の多くが、斬り込みを行い命を落としたのだろう。

もちろん本論考は古川の記述の沖縄戦における正確性を問うものではない。兵士として戦場に臨み、生き残り、それを記述するにあたり、著者の中に前景化されたものが何であるかを分析するのである。

北飛行場に赴任した後、昭和十九年十月十日の空襲で軍事施設は打撃を受ける。「即ちかかる大部隊の近接を全く予知することの出来なかつたわが電波警戒陣の劣勢と、通信網の不備、対空火器の無力が明かとなり、現在のわが防御設備では、今後永く米機動部隊とその優勢な航空兵力の跳梁に、この島を任せる外なき悲境が暴露されたのである（二四～二五頁）」といふ現実を把握しながら、「それでも、当時何もなおこの復讐に堪え得るわが航空陣の健在を疑わなかつた。希望はただ友軍機の飛来に繁がっていた（二五頁）」と、「初出版」にはごく一般的な希望論が語られる。戦場にいた、ある

いは戦場から生きて帰還した古川がどのタイミングで知ったのか不明だが、「初出版」には「一兵士の眼差し」を越えた認識のありようが何カ所か示されている。

さて、これに対する米軍の陣容は如何。その実体をここで明かにすることは、話の興味をそぐことになるが、以下述べる事項などは、当時日本現地軍当局でも薄々知っていたのである。／即ち、米軍による沖縄上陸作戦は、一九四四年秋より準備せられ、ハワイのオアフ島に置かれた作戦本部は、着々航空写真、諸情報の蒐集を続け、上陸演習は南太平洋地域で連続実施されていた。

（四四頁）

上陸車は一発の応射もしない日本軍の態度をいぶかりながら、悠々所期の上陸を終え、翌日には泡瀬裏海岸に猛進、二日間で本島を南北に切断してしまつた。すべての場合最も犠牲の多く出る上陸戦を無血ですませた米軍は、その後もまるで観光にでも来たような静穩な前進を続けたらしい。期待外れのこの静けさに対して米国のラジオは、／「この島の司令官は余程の馬鹿か、或は余程の戦術の大家である。」／と評していた。（四九頁）

だが「初出版」にはこういった記述は決して多くはない。牛島司令官や長中将の自死については、一三六から一三七の二頁分に書かれているだけで、八原高級参謀の情報は見受けられない。その場に不在の筆者の語りは、極力抑えられ、自らの体験した戦場が記録されている。「初出版」では「一兵士の眼差し」が基底となり、沖縄戦が「記録」されているのである。

ところが、「改訂版」で前景化されるのは、沖縄戦を俯瞰しようとする、〈巨視的な視点〉であった。古川の語るところによると、「（昭和——引用者）二十二年の末、沖縄守備軍の高級参謀八原博通氏が中央社を訪ね、沖縄決戦の手記を提示、出版の意向を述べられた」という事情がそこにはあった。この出版はGHQにより妨げられたため、また「私は最初の著書が私一人の行動を中心としたため、軍全般の動向の叙述に乏しく、読者から補足を求める声もあつた」ので、「将軍と参謀と兵と、そして殺伐な洞窟生活に彩りをそえる軍司令部奉仕の女性群にも光をあてて、沖縄決戦という一大悲劇の中で、軍の運命を握る人物がそれぞれどう考へ、どう動き、そして敗戦という冷酷な現実をどう迎えるか、さらに生き残った者はここで何を悟るかを描こうと努めた」作品として書き直すことにしたのである。<sup>20)</sup> それは『沖縄の最後』の続編として出版された『死生の門』<sup>21)</sup> を経由するかたちで、『沖縄の最後』の「改訂版」に反映された。したがつて「改訂版」は、戦場を巨視的に捉えた作品構成となつている。

当時、陸戦全般の模様は、どのようになつていたであろうか。／主陣地首里の表玄関、前田では、そのまわりも、高地の上も、すつかり敵に占領されながら、石部隊の花、賀谷中佐がわずかの生存者をひきいて、地下の洞窟から反撃をつづけ、手榴弾と爆雷による血みどろの肉弾戦をくりかえし、また仲間では同じく石部隊の山本少佐が中心となつて四月二一日以来すつかり敵の重圏下に陥ちながら、なおも奮闘をつづけていた。（一三六頁）

例えば、「改訂版」ではこのような、後付の認識が披露される。古川が述べるように、「初出版」において不充分であった内容を補完するかたちで「改訂版」は存在するといえる。また「改訂版」が、河出書房の意図した企画「太平洋戦記」シリーズの一冊であつた点も見逃してはならない。「初出版」から「改訂版」へとテクストが変遷する際に起きた大きな変化のひとつは、こういった〈巨視的な視点〉の挿入であつた。

ところで鳴津与志は沖縄戦をえがいた作品を類型化して次のように示している。<sup>(22)</sup> 「第一類型 戰鬪経過中心の戦史、戦記。／第二類型 沖縄現地の総合的体験記録集。／第三類型 個人及び団体の手記、記録。／第四類型 日米両軍の公刊戦史。／第五類型 日米両軍及び沖縄住民の総合的戦史」。「沖縄戦記の嚆矢」として紹介される『沖縄の最後』の「初出版」は、ここでは「第三類型」に分類できるだろう。また仲程昌徳は沖縄戦記述の時期を次のように分類する。<sup>(23)</sup> 「第一期 敗戦から一九四九年まで。本土出身の兵士によって書かれた作品を中心として沖縄戦が紹介された時期。／第二期 一九六〇年代後半から一九七〇年代初期まで。沖縄戦を体験しなかつた本土在住の作家たちによって沖縄戦が書かれた時期。／第三期 一九七〇年代初期から現在まで。非戦闘員であつた人びとの戦争体験を集め記録化した時期」。仲程に従えば、古川の「初出版」は第一期にあたり、また「改訂版」は第二期にあたる。高度経済成長、日米安保とからみ、沖縄の日本復帰という問題が現前化される時期にあつて書かれたのが「改訂版」であつた。〈巨視的な視点〉を獲得した「改訂版」は、また鳴の類型

では「第一類型」を横断することになる。戦後二十数年が過ぎ、「沖縄戦を体験しなかった」作家の作品が増える中、では戦争体験者である古川の視点はどこに向かっていくのだろうか。

#### 4 「初出版」テクストの形成

『沖縄の最後』の「初出版」形成には、記述、脱稿から出版に向けての問題点がある。

「初出版」に関して、古川は「私が『沖縄の最後』の稿を起<sup>こ</sup>したのは、昭和二十年の初秋、沖縄戦終了の直後、場所は屋嘉収容所のテントの中であった」と述べている。<sup>(24)</sup>さらに「屋嘉収容所で書き綴つた『沖縄の最後』は、米軍から手に入れた便せんに、鉛筆で八十五枚、二冊に分れ、前篇は高射砲大隊の鯖江出発から首里城落城まで、後篇は流浪の兵となり、東風平の山三四七六部隊への編入から六月十九日、摩文仁の丘より山部隊本部の最後を見見するところまで、そこで筆をおいている」とあるように、収容所で書かれた二冊分の前半は「首里城落城まで」、後半は「山部隊の最後を見見るところまで」、つまり戦場のスケッチが主となっているのである。復員した古川は中央社からの出版の機会を得るが、「一、用紙の破局的窮乏状態／二、G H Qの検閲で発禁のおそれであること」が理由で進展しない様子がうかがえる。「沢本社長（中央社——引用者）は諦めず、G H Q検閲責任者と度々会った末、企画そのものは妥当との内意を得たらしく、「G H Q検閲（正確には内閲）」で、「こ

「も駄目」「こも不適当」と満身創痍、語り部が流れるように歌い上げた筈の私の叙事詩は、「米国に対する敵愾心をあふる」の理由でチェックされ、各頁共赤インクと警告の付箋つき、哀れな姿で帰ってきた」が、「……私自身の手で「あまりにも悲惨」と指摘された幾か所かを削り、牛島軍司令官、長参謀長の辞世などは出版社の配慮で省かれた。収容所での印象も米国人のいわゆる学力の低さ、読み書きに弱く、簡単な掛け算も身についていないなどの叙述は遠慮した」と記されている。<sup>(25)</sup> ここには検閲との葛藤が示されている。「初出版」には古川の指摘した内容は確かに記されていない。だが（後述するが）、「収容所での印象も米国人のいわゆる学力の低さ、読み書きに弱く、簡単な掛け算も身についていない」という認識と大きく乖離した米軍人への親和性は「初出版」の根幹をなし、テクストから容易に読みとれる。

ここで古川に意識されているのは、一九四五年九月二十一日に出された日本出版法（プレスコード）であることは想像に難くない。「日本出版法は、出版の制限ではなく、出版機関を教育し出版の自由の責任と重要性を示そうとするものだとされているが、そしてある程度そういう意味を持つていたらうが、内実は言論の検閲を目的とするものであつたことは明白である」<sup>(27)</sup> という側面がある以上、一九四六年五月に復員した古川は出版に際して、件のプレスコードと対峙したであろう。「過去の戦争をうかがえる軍事的な要素を削除すると同時に、現在の占領下のアメリカによる進駐の現実を削除するGHQ／SCCAPの検閲によつて、戦争と占領の記憶に修正が加えられようとしていた」<sup>(28)</sup> という状況

下において「初出版」テクストは生成されたのである。

古川は「二十二年十月という物資窮乏どん底時代の産物、用紙は最低の粗悪さ、表紙は日本画家によるペイン画の淡彩、沖縄の風景と水汲みの女が描かれていたが、いかにも淋しい装訂であった」と述べているが、本書は二一四頁におよぶ。戦後の早い時期、沖縄が本土から切り離され不可視化されいく状況にあって、「第一部 ひらけゆく心」において米軍人を賛美する古川は、G H Q / S C A Pとの争点を持たない作品を書き上げる必要があった。ここで古川の言うように刊行するため検閲を受諾してテクストを修正したのかという問題が浮上するが、『沖縄の最後』に関する検閲資料は管見の限り見当たらず、また古川成美の一九四九年五月『座談』掲載「沖縄最期の日」、六月『面白俱楽部』掲載の「女学生従軍記」においては検閲の「無」が確認できる。<sup>(2)</sup> 検閲との葛藤、米軍人への蔑視といつた感情が検閲により後退したのなら、「改訂版」においてその一面が前景化する可能性もありうるはずだが、古川は「改訂版」からは収容所での様子（「初出版」の「第一部」）を削除している。「初出版」が、検閲側にとって善良なテクストであったことは言うまでもない。戦争と占領の記憶の修正という文脈上、死を覚悟した帝国軍人から生を与えられた米軍の捕虜への位相転換において、収容所の米軍人の善意を称揚する古川のテクストは、模範的なテクストであった。また古川自身の模範的態度について、一九四七年十一月刊行の最初のテクストに付された「著者に対するクレマ中尉の推薦状写し」（「輸出版」からは削除）からうかがえる。収容所運営のクレマ中尉は〈He has served

me well, and has never committed any act which caused me to distrust him (彼は、信頼を欠く行為をやめ、よく働いた（拙訳、以下同）)。〈While here his cooperation and hard work have aided this office in administration of some 16,000 Japanese Prisoners of War (収容所にいる期間、彼の協力と効率が一万六十に及ぶ収容者の管理運営事務を助けた)〉 ふたりとも。されど、〈to vouch for his sincerity, and trustworthiness (彼の誠実と信頼を保証する)〉 ふくろ中尉は宣言す。

「出版社が三版、五版と版を重ね、海外同胞からも求めがあつて北米、ハワイ、南米へ送られ」、「その中の幾冊かが占領下の沖縄へも届いたらしく」と古川は述べる<sup>(30)</sup>が、当時の出版状況において海外への輸出には占領軍の意向の反映があるだろうし、それはまた検閲主体側における〈善良なテクスト〉としての認知が必要であつただろう。「初出版」は以上のように流通し、また版を重ね海外や沖縄へ「輸出」されたのである。

古川は「初出版」の「自序」において、「いの貧しい一書が、肉親の面影を逐うて、日夜その消息を求めている遺族の方をはじめ、多くの人々に読まれ」ることを期待していた。また、「改訂版」の「あとがき」でも、「初出版」に関して「第一は、私が身をもつて体験した戦いの真相を本土の人びとに伝え、戦友の最期を遺族のかたがたに報告する」。第一は、本土の身代りとなつてくれた沖縄、一〇万の将兵がそこで生活し、そこで戦つた沖縄のことを本土の人びとに理解してもいい。第一は、

三は、アメリカ人に關することで、死屍にひどい私を救出して、ていねいな処遇と治療を加えてくれた米国第七師団の兵士たちをはじめとして、私の接した米国人は、いずれも人間的で親切で、公正であり、私はその心の豊かさに頭がさがつた」と記している。だが件の「初出版」には戦友に關しての記述は決して多くない。岡本恵徳は「そこに記されるのは古川個人の体験の範囲内であって、沖縄戦全体の動向はみえにくいし、従つてまた、主として記録されるのも行動をともにした数人の兵士たちの姿であつて、住民の姿は全くといってよいほど視野に入つてこない」という問題点を挙げている。<sup>(31)</sup>以上のことから、誰に向けられた刊行物なのかという点、戦場における沖縄県民への古川の不可視、米軍人への過剰な親和性といった問題が浮上する。

沖縄南部を流浪する「初出版」の記述において、ヒューマニストの津田少尉や後半行動を共にする鮫ヶ井（「改訂版」では醒が井<sup>(32)</sup>）、森川、山本、大西、高井といった戦友が登場するが深いエピソードが語られるわけではなかった。流浪の中、「初出版」に興味深い挿話がある。

その畠の真中で、ふと逆に南から走つてくる兵隊の姿が目に入った。近づく、近づく。でこぼこの畠の中を、ピヨンピヨンとぶようにやつてくる。その兵隊は、／「あッ。」／「浅野兵長だ。」／戦場に、奇蹟、奇遇は珍しくないが、これはあまりにも奇遇だ。一瞬、一瞬に幾百の生命をさらつてゆくこの鉄火の嵐の中に、そのほんの一ときのしじま、そしてこの荒涼たる焼野ヶ原に、われは傷づいて地に匍い、彼また痛手を負うて、竹杖にすがる姿も悄然と、この地の一点に相見

えたのである。(一一〇頁)

このように記された「あまりにも奇遇」な再会は、しかし「改訂版」からは削除されている。<sup>(33)</sup>これほどまでに感動された戦場での「奇遇」な体験は、記憶違いがあったのか、創作性の強い挿話だったのが、削除の理由は詳らかではない。

また「初出版」には女子挺身隊についての記述がある。収容所内で耳にした「故郷の白百合」という歌を契機に、挺身隊の面影が想起される。「彼女たちは、白百合の気高さをどこまでも慕つて、思いつめた一筋の聖処女への道を歩んで行つてしまつた。われわれは、あのばら色の頬をふくらませて、鈴をふるような声で、嵐のなかに、この歌をうたつた可憐にして気品に満ちた姿をもう見ることはできないのである(一六九頁)」。ここには所謂「ひめゆり学徒隊」を明確に示す文言はないが、「改訂版」には

またある夜、それほど遠くない岩穴に数名の女学生がきて歌を歌う声がきこえた。声だけで「ひめ百合部隊」の女学生と判断したのだが、死の静寂の岩窟に、それはこの世の声と思えぬほど清らかに澄んできこえた。／三木と一人、われしらず流れ出る涙が頬を伝うにまかせつつ全身を耳にしてそれをきいた。歌は私の知っている「故郷の白百合」であつた。(二二九頁)

という挿話がある。ここには時差の問題が確認できる。すなわち、宮永次雄が「ずっとあとになつてこの(ひめゆり学徒物語の——引用者)原作者が、小禄収容所にいる三瓶という三十三になる人で

あることを知ることが出来た。読みものに飢えたP・Wたちのために、彼が作業場で、島の娘から聞いた話を綴つたもので、小禄で毎週一回ずつ開かれた朗読会で好評を博したということも聞いた」と指摘するように、<sup>(34)</sup>三瓶達司によつてもたらされた物語は様々に流布し、一九五三年には石野径一郎原作、水木洋子脚本、今井正監督によつて『ひめゆりの塔』として映画化された。殉国の乙女といふ可憐で切ないイメージは、この映画によつて決定的となつたといつても過言ではない。「初出版」執筆時に判然としなかつた情報が、時差を伴い、また殉國乙女のイメージを付加しながら流通した物語として、古川が撰取し、「改訂版」に「声だけで『ひめ百合部隊』の女学生と判断したのだが、死の静寂の岩窟に、それはこの世の声と思えぬほど清らかに澄んでき」と書いた」と書き加えたのだといえる。つまり、「初出版」においては一次的に体験された沖縄戦の記述が主だったのに対し、「改訂版」では二次的に、戦後に流通した沖縄戦のイメージを結合する形で物語が再構成されているのである。重要なのは古川の体験の正誤ではない。「改訂版」において何が選択されたか、そこにどのような問題が含有され、「沖縄戦」の諸相として流布するかである。

## 5 〈住民描写〉の不在と〈米軍人との親和性〉

前章で提示した「改訂版」の「あとがき」で、古川は「本土の身代りとなつてくれた沖縄、一〇万

の将兵がそこで生活し、そこで戦った沖縄のことを本土の人びとに理解してもらうこと」がテクスト形成の目的のひとつだと述べていた。また沖縄に関して、「改訂版」では、「私は沖縄を「身代りの島」とよんでいる。日本本土の身代りとなつてくれた島だからである（二四五頁）」と記しているが、その件の沖縄に対する古川の眼差しは皆無といつてもよいほどである。「初出版」に対しては前章、岡本恵徳の「住民の姿は全くといってよいほど視野に入つてこない」という指摘の他にも、山田潤治が「沖縄戦の記述が、「軍人」の視線からの叙述に終始しており、沖縄でもつとも被害をうけた、沖縄住民についての記述がなく、沖縄に対する視線が完全に欠如してい」て、「作品全編を通じて、ともに戦つたはずの沖縄住民の記述がないという事実は、古川が、沖縄住民の存在を存在としてみとめていないという認識の欠如を裏付けており、この古川の無意識の認識欠如が、沖縄人の憤慨を招いた」と述べている<sup>(5)</sup>。例えば、「初出版」には次のような記述がある。

（台風が来る。）／というので、山の幕舎を撤収してわれわれは始めて民家に舍營した。過去二ヶ月、一回の外出もなく、ただ熱汗作業に従事したわれわれは、台風のお蔭で住民の温い親情に接することが出来た。嵐が過ぎて月が出ると、民家の庭に筵を敷いて簡素な宴に空遠い故郷を偲んだ。（二〇〇頁）

やがて島の正月が訪れた。住民はまた秋の明月の時のようにタピオカの餅を搗き、泡盛と豚肉の煮付を用意してわれわれを招いてくれた。畳というものを知らぬ村人の家では、黒い板の間に敷

かれた筵が珍しい客への心盡しであつた。中隊の方からも久しぶりに煙草や飴玉の加給があつて、頭の禿げた老兵達も相好を崩し、一杯機嫌で歩く野路には董が咲いて、まことに麗らかな楽しい初春の一日であつた。(二九頁)

ここでも「故郷」の風物を想起するための契機として沖縄の民家の様子が描写されている。「改訂版」の「あとがき」では「また戦いがはじまるまえの兵士の生活や沖縄の風物についてもていねいに書いた(二四九頁)」と述べられている。確かに沖縄の風俗ハヂチや、聞いていたよりも学力が進んでいること、またランプがない村の後進性の逆説的な安らぎ、琉球言葉に対する鎌倉時代の候文の如きだという感想は述べられている。<sup>(36)</sup>しかし、戦争の惨禍に巻き込まれる住民への眼差しは依然欠如したままである。それは、古川自身の沖縄戦に対する感慨とも関係がある。

もしこの戦いに敗けたら国家も民族も滅びてしまうのだと考えていた。いや、天日もためにかけり、海もあせるとさえ思いこんでいた。しかし、海はもとのまま青く静かに広がり、日はやはり赤くもえて空にのぼつた。まるで何事もなかつたかのように、戦争も、敗戦もこの大自然の偉大な営みに比すれば、あるいは地上のほんの一部のできごとにすぎないのではないか。(「改訂版」

／二三七頁)

ここには日本軍戦死者九万五千人、沖縄住民の死者十万人以上、住民の三人に一人が犠牲となつた  
といふ沖縄戦<sup>(37)</sup>への当事者意識の欠落が見てとれないだろうか。軍人勅諭に従い死を欲しながら生き残

り、やがて復員していく（あるいは「改訂版」の引用ゆえ、戦争時点から時差があるのかもしれない）兵士にとって、沖縄ははるか南海の彼方、大自然の中に放擲されている。「軍隊の名のもとに、積み重ねられた忍苦と犠牲が、あまりにも大きかったことを頼りに、その代償がなんらかの形で払われる」ことを心ひそかに期待していた（一六〇頁）<sup>38</sup>と語る古川は、強固に内在化した旧日本軍（軍人勅諭）理論を保持したまま、勝利という戦争の目的に対し、「死に場所を探す」という倒錯性を容易に内包する。もちろんこれは、当時の「戦記物」の多くにみられる記述であり、一方では旧日本軍の置かれた状況、その上での戦争遂行の不可能性を告発する側面を示す。だが、『沖縄の最後』に欠落するのは住民への眼差しであり、戦争の表層を、戦後の資料収集から再構成し得たものに過ぎない。つまり、「改訂版」は、軍隊の理論、戦争の困難の再構築であり、作者が感知したかもしれない住民の声（例えば、「沖縄を守る」日本軍への期待の声）は、「改訂版」を経ても引き続き捨象されているのである。

「初出版」における最大の問題点として、著者古川と収容所内での米軍人との親和性を挙げることが出来る。先行論文においてもその点は指摘されているが、具体的な箇所を踏まえながらは述べられていない。そこで「初出版」の「第二部 ひらけゆく心」を読んでみると、怪我をした古川が米軍に収容され、民主主義やキリスト教的博愛主義を享受する場面が中心に描かれている。

(新聞に、ラヂオに、鬼だ、鬼だと軍部から教えられてきたために、たれも恐れていたけれど、つい四五年前までは、友達だつた米人ぢやないか。陽気な、愉快な米人ぢやないか。) / 運命の兵士は、ここでその無数の苦悶の鉄鎖のうちの一本をハラリと断ち切つた。/ この一本の鎖のために、何千の兵士が、何万の住民が、助かるべき生命を自ら捨てたか分らない。怖しい錯誤だつた。恐ろしい宣伝であつた。/ 私はその日から、自分をつなぐ黒い重い無数の鎖を一本一本と切つて行つた。そしてただの一度も、後悔や失望に見舞われたことがなかつた。(一五五頁)  
(愛だ。愛がなくては、とてもあんな親切な手当ができない。日本人なら、どんなに不平をいいながらやることだらう。しかもあの慈愛に満ちた顔、さも可哀そうにといふようなあの眼、ああして私も助けられたのだ。) (一五六頁)

ここで古川は、それまで長い間抱いていた敵軍への思いを「無数の苦悶の鉄鎖」に例え、一本を断ち切ると、他の鎖も霧散してしまつたと述べる。生命が助かり、食事を与えられたことは、死を覚悟した兵士にとってどれほどの喜びであつただらうか。死生の境界上を行き來した古川は、沖縄戦という極限的状況下においてまさに「死」の側にいた。だが、幸運にも彼は「生」の方へ越境することができた。

収容所内で親しくなつたというホップス小父さんと綽名された年下の米兵とのやりとりに次のような場面がある。

「わしが世話をした日本人は何百人かしれない。みんな元気になつた。だのに、あの男は何故死んだのだ。あらゆる手をつくした。私は米人も日本人も決して区別をしないつもりだ。だのにあの男は死んだ。わしの誠心が足らなかつたのだろうか。可哀そうに、なぜあの男は死んだのだ。」  
 ／駄々をこねるように泣くホップス小父さんにつられて私も泣いた。心の底から泣いた。人のまごころにふれた暖い涙が止めどなく流れ出てベッドをぬらした。（一六二頁）

注目すべきは、古川がこの米兵の悔恨の涙に感化される様子である。ここでの古川の涙は、死んでしまった同胞日本兵にではなく、涙を流す米兵の「愛」に裏打ちされた行動への感謝のそれであり、米軍人の側の「涙の共同体」に与するものである。

「こういう一点の邪心のない神のような抱擁力（一八四頁）」、「言葉は通じなくとも、まごころは必ず通じ合う（一〇三頁）」といった言説からは、二者択一的な視点により日本を裁断し、アメリカに賛辞を送る様が読み取れるだろう。同時に、戦場であつた沖縄への視点は見事に欠落している。古川は、日本軍と米軍をヒューマニズムの差異として解釈する。

「初出版」には「われわれが、あらゆる困苦をしのび、あらゆる犠牲に堪えて、この戦をつづけえた力、それが、／（日本は神国だ。）／の信念であつた。ここにのみ希望を托しての忍従であり、献身であつた（一〇九頁）」とあるが、「改訂版」には同様の場面で「降伏勧告状」に揺れる感情が描かれる。それでも、日本軍の兵士として、流浪を中心としながらも、降伏はしなかつた。米軍収容所における

る、安堵、満腹は精神と肉体の両面に作用したことは言うまでもないだろう。そのような状況で、ヒューマニズムを軸に、日本軍への帰属意識を捨象し、米軍の民主主義を選択する。物量的にも豊かな米国への憧憬が前景化するとともに、戦場として一般住民の犠牲者を多数出した沖縄は後景化する。もはや同情も悔恨もそこにはあらわれない。いわば古川は〈転向〉をする過程で、沖縄の独自性も戦場としての惨禍も忘却しているように思われる。「第二部 ひらけゆく心」に示された〈米軍人への親和性〉の背後にはこういった忘却のメカニズムが働いているのである。<sup>(38)</sup>

この「第二部」は「改訂版」からは削除され、その点が両テキストの大きな差異となつてている。先に述べたように、テキスト生成のプロセスにおいて、古川は検閲の問題を提示していた。刊行するにあたってGHQ／SCAPと争点を持たないテキストを記述することもひとつの戦略であろう。しかし、「改訂版」において、古川は沖縄戦の全体像をえがくことを志向していた。一九四七年の「初出版」から一九六七年の「改訂版」までの沖縄の歴史はテキストには書かれない。沖縄が戦後に歩んだ歴史、在琉米軍との葛藤に眼差しは向けられてはいない。「改訂版」の「あとがき」には「戦中の――引用者）アメリカ人に対する認識を改めるとともに、日本人の世界観、人生観には外から強いられた偏狭さのあることをともに反省せねばならぬと思った」とあり、検閲のない状況においても、米国への親和的認識に変更はないのである。その意味で、「初出版」で忘却された沖縄は、「改訂版」でも忘却され続いているのである。<sup>(40)</sup>

## 6 植民地への眼差し

また古川の沖縄を見る視座の内部に、植民地への志向性をみてることも可能かもしれない。「改訂版」には、「ところが、一九年六月、米軍は太平洋の真直中に侵入、まさかと思つたサイパン島はあつという間に奪われてしまつた。大本營は大いにあわて、ここでの姉の二の舞をさせてはと、妹にあたる沖縄の防衛にありつたけの力を注ぐこととなつた（三三三頁）」と書かれている。〈大日本帝国〉により占拠されたサイパンを「姉」という女性表象で語り、またその延長上に沖縄を安易に配置してしまう古川にとって、結局、沖縄は日本の一部たる「沖縄県」といった認識は希薄だと言わざるを得ない。〈サイパン／沖縄〉の関係が〈姉／妹〉という女性表象として例えられ——植民地を描く際の常套的な言説として前景化されている点は注目すべきであろう。

それゆえ、古川にとって沖縄は常に外部化されているのである。沖縄戦に参加しながら、沖縄に対して当事者性を欠落した言説が維持されているその根には、「初出版」における次のような認識があるだろう。

（ああ、祖国へ帰るのだ。なつかしい父母の国へ。）／船は私達をのせるとすぐ航進をおこした。中城湾をまつすぐに南へ出ると、あの摩文仁の海岸だ。私が血と膚にまみれて横たわっていた、

そして幾万の同胞が死んで行つた島の南端、思いなしか、春霞にかすむその山かげの根方は白くよどんで、万骨累々として私を呼んでいるように感ぜられる。さらば沖縄よ、たれも口を開くものはなかつた。帰りゆかんとする故国を思い、去りゆかんとするこの島の往時を偲んで、万感ごもごも迫る胸は、いま張り裂けるばかりなのだ。／船は舳を北に転じた。／日本へ、日本へ、千万無量の思いをのせて船はもう島影も見えぬ青海原をひた走る。／水平線の彼方、雲白く屯するところには、理想へのなお遙かなる道を共に涙して進むべき同胞の國日本が待つてゐる。(一一)

## 四貢)

例えは、〈南洋〉進出する大日本帝国にとつて「外南洋」と「内南洋」という線引きの中、沖縄は「内南洋」に配置されながらも「内」なる認識から遠い外に置かれた。<sup>(41)</sup> だが、敗戦とともに、閉じられた日本帝國版図の文字通り「外」側へと捨象された沖縄を見る眼差しこそが、「祖国・故国・日本」と「島・沖縄」を峻別するのである。

再度確認したいのは、古川が幹部候補生、大学の史学科を卒業した知識人であつた点である。戦後の記録文学ブームの中にあつて、沖縄戦の嚆矢たる『沖縄の最後』を書いた古川は、一兵士であると同時に知識人として、戦場をみてきた。例えは、大岡昇平が「私は既に日本の勝利を信じてゐなかつた。私は祖国をこんな絶望的な戦ひに引きずりこんだ軍部をにくんでゐたが、私がこれまで彼らを阻止すべく何事も賭さなかつた以上、彼らによつて与へられた運命に抗議する権利はないと思はれた」

といった冷静な感慨と、古川は乖離している<sup>(42)</sup>。戦争を終え、収容所に入り米軍人へ親和性を示す古川の在り様は、〈転向〉の境界を容易に越境する知識人の型としても記憶されるだろう。

## [注]

- (1) 古川成美『沖縄の最後』初版本は中央社から一九四七年十一月に刊行されている。
- (2) 古川の『沖縄の最後』にはいくつかのエディションがある。ここでの経歴については河出書房、一九六七年十二月の太平洋戦記シリーズ、七二一～七三頁を参照。
- (3) また戦後は、広島文理科大学史学教室に勤務、後に和歌山県教育委員会指導主事、和歌山県立日高高校、田辺高校の校長も務めている。
- (4) 『沖縄の最後』における表紙や「絵、挿絵などのパラテクスト（ジエラール・ジュネット）の分析として、松下博文「『沖縄の最後』表紙考——パラテクストの比較図像学的考察（1）——」（『蒼翠』二〇〇一年三月）がある。
- (5) 古川は「はからずもの」の『沖縄の最後』が、占領軍当局の厚意によつて先ずひらかれた貿易の窓を通じて、遠く海外の皆様に読んでいただける機会に恵まれましたことは、戦中戦後の急転に思いくらべて、まことに無量の感慨を禁じ得ません」、「もとより未熟な一学究のささやかな著述ではありますが、戦いの惨苦を身を以て体験した日本の一兵士の赤裸々な記録であるというところに、何等か異つた特色を見出していた

だければ幸であります」、「私もまた、今度の戦争が日本人を根底より覚醒し、日本と諸外国との間の理解を深め、眞に世界の人々より愛せられる日本を築く契機となることを信じ、その実現のために奇蹟的に拾つた自分の余生を捧げてゆこうと期しております」と述べている（『沖縄の最後』中央社、一九四八年六月五版）。ここでは、「占領軍当局」との関わりが指摘され、戦争体験者としての記述性と、新生日本への思いが語られている。

(6) 『沖縄の最後』の続編として刊行された『死生の門』において、古川は沖縄戦における高級参謀で作戦主任だった八原博通の手記を基に作品を仕上げている。そこで得た沖縄戦の全体像は改訂版『沖縄の最後』へも流用されている。

(7) 岩上順一「記録文学について」（『新日本文学』一九四六年三月）

(8) 松本正雄「最近のアメリカ文学——主として戦争記録文学について」（『新日本文学』一九四六年四月）

(9) 浦田は、福岡県警察協議会発行（発行人福岡県本部教養課）の『時鐘』（一九四九年九月）掲載「読書放談 戦争記録文学書について」を紹介している。そこでは古川成美の『死生の門』（『沖縄の最後』続編）や、大岡昇平『俘虜記』について「日本という国家の力に人間としての存在をすべて委ねていた日本人が、何の背景もない赤裸々な個人として世界の中に拠り出された時に暴露するいろいろな欠点について私共に反省の資料を与え」との指摘が報告されている（浦田義和『占領と文学』法政大学出版局、二〇〇七年二月、二九五頁）。他に、「群像」や「人間」、「文芸春秋」における記録文学への言説も紹介している。

(10) 「編集後記」（『雄鶲通信臨時増刊 特選記録文学』一九四九年八月）

(11) 「編集後記」（『雄鶲通信臨時増刊 特選記録文学 第二集』一九四九年十月）

(12) 「(考査事務参考資料第四号) 戰後記録文学文献目録 稿」（「国立国会図書館一般考査部」一九四九年十二月二十日）

(13) 「(考査事務参考資料第四号) 戰後記録文学文献目録 稿」の「沖縄の最後」項には、「本書の前半は現広島文理大教官古川氏が、高射砲隊の幹候生として沖縄に上陸した昭和十九年八月十一日から二十年三月二十三日の大空襲、それにひきつゞく艦砲射撃による阿鼻叫喚、最後の完全なる陥落に至るまでの死の体験である。／後半は「ひらけゆく心」と題され、米軍進駐下の平和な俘虜生活の感激的な記録。前后、よき対照を形造つてゐる」という解説が付されている。

(14) 中野好夫・新崎盛暉『沖縄戦後史』（岩波新書、一九七六年一〇月、一三頁）

(15) 仲原善忠「文化活動の一年」（『沖縄文化』一九四九年第三号／『仲原善忠全集第四巻』沖縄タイムス社、一九七八年三月所収より引用）

(16) 比嘉春潮「死生の門」を読みて」（『沖縄文化』一九四九年第四号）

(17) 沖縄県公文書館所蔵DVD、「米国国立公文書館所蔵沖縄戦等映像フィルムDVD／111—ADC—04 826」や、「米国国立公文書館所蔵沖縄戦等映像フィルムDVD／「大量の投降者、沖縄 1945年」／RG107—1377／U16—16」に見受けられる。

- (18) 玉城栄祐「読谷山（北）飛行場の建設」（『読谷村史』第五巻資料編4 戦時記録下巻、二〇〇四年三月、三頁）
- (19) 玉城裕美子「読谷山村への日本軍部隊配備」（『読谷村史』第五巻資料編4 戰時記録下巻、二〇〇四年三月、四〇～四一頁）
- (20) 古川成美「わが沖縄—その原点とプロセス 取材ノートを中心に」（「死生の門 下」『琉球新報』一九七三年十月二十七日）
- (21) 古川成美『沖縄戦秘録 死生の門』（中央社、一九四九年一月）。本作は出版月からみても、一九四九年の記録文学ブームにおいて先駆けとなる作品である。また翌二月には再版され、「海外輸出記念新装版」として海外輸出の目論見があつた点がうかがえる。
- (22) 鳴津与志「沖縄戦はどう書かれたか」（『沖縄戦を考える』ひるぎ社、一九八三年五月、一一〇頁）
- (23) 仲程昌徳『沖縄の戦記』（朝日選書、一九八一年六月、九頁）
- (24) 古川成美『わが沖縄—その原点とプロセス 取材ノートを中心に』（「沖縄の最後 上」『琉球新報』一九七三年十月二十五日）
- (25) 古川成美「わが沖縄—その原点とプロセス 取材ノートを中心に」（『沖縄の最後 中』『琉球新報』一九七三年十月二十六日）
- (26) 注(25)に同じ。

(27) 川津誠「GHQとプレスコード——占領軍検閲の実態」(『発禁・近代文学誌』學燈社、二〇〇一年十一月、一二一～一二三頁)

(28) 十重田裕一「葛藤する表現と検閲」(『占領期雑誌資料大系 文学編Ⅱ第一巻』岩波書店、二〇一〇年一月、三頁)

(29) NPO法人インテリジェンス研究所「20世紀メディア情報データベース」による検索結果。

(30) 古川成美『わが沖縄—その原点とプロセス 取材ノートを中心に』(『死生の門 下』)『琉球新報』一九七三年十月二十七日)

(31) 岡本恵徳「軍人」の眼による沖縄戦戦記」(『現代文学にみる沖縄の自画像』高文研、一九九六年六月所収)

(32) 「初出版」には「鮫ヶ井、私は、さがしても、さがしても分らぬお前の家族が、若し読んでくれたらと思ってこの筆を進めているのだ。／一緒に溝におちた三木少年が、鮫ヶ井が死んだ日からまた私の生命の恩人となつた」(一三五頁)という記述がある。重要な戦友であるようだが名字の漢字に差異がある。

(33) 「改訂版」においては、先に挙げた(巨視的な視点)の添加や時代に合わせた文章の洗練さなどが指摘できるが、一方で「初出版」におけるエピソードが繰り返されている。例えば「初出版」では「ここは島の南端に近く、米軍の艦砲もまだ疎らであつたので、民家には避難民が住み溢れてた。軒下にも木陰にも、憔悴と恐怖に青ざめた顔が、われわれの自動車のヘッドライトにまで怯えていた。幼児を抱えた女の姿が一

人哀れであつた」（八五頁）とあり、「改訂版」には「その夜おそらく、われわれは山部隊戰闘指揮所を設営するため、さらに新垣に移動した。新垣は、もう島の南端に近い。敵の艦砲もまばらで、民家には避難民があふれていた。軒下にも、ガジュマルの木陰にも焦悴と恐怖に青ざめた顔が、われわれの車のヘッドライトにまでおびえていた。ことに幼児を抱えて地面に坐っている女の姿がいとおしかつた」（一四七〇一四八）と記されている。

(34) 宮永次雄『沖縄俘虜記』（国書刊行会、一九八二年一月より引用）

(35) 山田潤治「〈脱周縁化〉する記憶——「ひめゆりの塔」の表象——」（『大正大學研究紀要』二〇一〇年第九

五号、三頁）

(36) 「改訂版」には「このころ、困ったことに、住民のあいだに敵と通じ合うスパイがいるといううわさがあち

こちに起つた。／夜、丘の上に立つと、あちらの山、こちらの海に、人魂のように灯がゆれて昇つた。なるほど、海上の潜水艦となにか合図をしているのかとも思えた（六四頁）」という記述がある。沖縄戦下において、筆者が兵士の位相から住民を認識していた点がうかがえる。

(37) 『沖縄大百科事典』（沖縄タイムス社、一九八三年四月）、「沖縄戦記」（大田昌秀担当）を参照した。

(38) 仲程昌徳は「アメリカの兵士たちの行為への賛嘆が、日本（人）への批判につながる。その思考の単純さを指摘することは簡単であるが、その大真面目さには、戦争のもたらしたもののが、何であつたかを問うことすらはばかりしめるものがある。というより、そうした問いを発することすら、むだに思われてくるほ

どである」（『沖縄の戦記』（朝日新聞社、一九八一年六月、二五頁）と述べ、作品全体の印象を批判的に捉えている。松下博文は「幸運にもこの作品がGHQの言論統制のもとで海外輪出版の許可に浴したとしても、内容があまりにも露骨なアメリカ讃美に終始していた」（『沖縄の最後』表紙考——パラテクストの比較図像学的考察（1））『蒼翠』二〇〇一年三月、五六頁）ため沖縄県民の不評をかつたと指摘するが本論の主題は表紙の変遷に意味を見出すものであった。また山田潤治は「作品後半は、捕虜としての収容所生活がえがかれているのだが、古川の奇妙なヒューマニズムに基づいたアメリカ人賛美も、沖縄人の不信を招いた点である」（「脱周縁化」する記憶——「ひめゆりの塔」の表象——』『大正大學研究紀要』二〇一〇年第九五号、三頁）と、「ひめゆりの塔」との関連を中心に述べている。

(39) 宮永次雄は先の『沖縄俘虜記』において「人間と人間だ。言葉が通じるとか通じないとかは末節である。必ず分るのだ。分れば良さも悪さも感じるであろう（二二六〇頁）」と述べている。またそういった両局面を理解し得ない日本兵の場合として、「米兵たちの明朗な日常を見、そのスマートな容姿に接すると、一も二もなく心酔してしまう者（二二五六頁）」を挙げ、「相手の人格や教養に就いては少しも考えようともしないで、色の白い背の高い外貌が、そのままその人の内容の具象でもあるかのような錯覚に陥るのである（二二五六頁）」と述べている。

(40) 復帰後の一九八八年新装改訂版の「あとがき」には「折りしも時の流れに癒されて、戦火に焼かれ碎かれた沖縄の山河はいまは深く緑を吹きかえし、珊瑚礁に囲まれた美しい島の上には不死鳥の様に蘇った沖縄

県民の平和な生活が築かれつつあります」と書かれているが、「癒し」という言説の中に、戦後沖縄の個々の歴史は消却される。やはりここでも、古川の眼差しは沖縄の独自性へと向けられていないようである。

- (41) 富山一郎「戦場の記憶」(日本経済評論社、一九〇六年七月)、「II 戦場動員」を参照。  
(42) 大岡昇平「俘虜記」(『文学界』一九四八年二月／『現代日本文学大系85』筑摩書房、一九六九年一月より引用)

\*資料引用にあたり、旧字は適宜新字に改め、ルビは省略した。

\*引用における傍線は引用者。また引用内の「」は改行をあらわす。

\*本稿は、「二〇一四年度沖縄文化協会公開研究発表会」において発表した報告原稿に大幅に加筆訂正したものである。会場で様々な意見を寄せられた方々に御礼を申し上げたい。